Osaka Gakuin University Repository

Title	ウラジミル・ミハイロヴィチ・フルスタリョフ著『皇太子アレクセイ・ニコラエヴィチ大公（1904 ～ 1918 年）　短い評伝』 Vladimir Mikhailovich Khrustalev, *Naslednik tsesarevich i velikii kniaz Aleksei Nikolaevich（1904-1918）, Kratkii biograficheskii ocherk*
Author(s)	広野　好彦 (HIRONO YOSHIHIKO)
Citation	大阪学院大学　国際学論集（INTERNATIONAL STUDIES）, 第 30 巻第 1・2 号：31-38
Issue Date	2019.12.31
Resource Type	Book Review/ 書評
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

ウラジミル・ミハイロヴィチ・フルスタリョフ著『皇太子アレクセイ・ニコラエヴィチ大公(1904～1918年)　短い評伝』

広　野　好　彦

Vladimir Mikhailovich Khrustalev, *Naslednik tsesarevich i velikii kniaz Aleksei Nikolaevich（1904-1918), Kratkii biograficheskii ocherk*

HIRONO YOSHIHIKO

ウラジミル・ミハイロヴィチ・フルスタリョフ著『皇太子アレクセイ・ニコラエヴィチ大公（1904～1918年）　短い評伝』（モスクワ、2017年）は、ロマノフ王朝最後の皇帝ニコライ２世の長男であるアレクセイ・ニコラエヴィチの評伝である。もっとも評伝というより、パンフレットと言った方が正確かもしれない。八つ折り版、全71頁、その中には37枚の写真が掲載されているが、それを順次眺めているだけでも、アレクセイの成長ぶりがよく理解できる。また付録として、アレクセイ日記の断片（1918年１月22日～３月28日：露暦）とアレクセイが友人のコーリャ・デレヴィエンコに宛てた書簡４通（1918年４月～５月）が収録されている。

この著書の手法は、史料をして語らせることに尽きる。アレクセイの父であるニコライ２世、母であるアレクサンドラ皇帝をはじめ、アレクセイの身近な人物の日記、回想録、証言などを、基本的には時系列的に並べたものである。精選されたものであることは理解できるが、引用史料などの背景についてはあまり語られず、さらに歴史的事実を正確に確定するという面ではあまり力が入れられていない。

アレクセイ・ニコラエヴィチは、1904年７月30日、ペテルゴフにおいて、ニコライ２世とアレクサンドラの第５番目の子供、初めての男子とし

て生まれた。皇帝継承が男系に限られるので、長らく待ち望まれた世継ぎの誕生は歓迎されて、８月11日に洗礼式が行われたことも詳細に述べられる。

生誕が長らく待たれた世継ぎの男子ではあったが、皇太子アレクセイは血友病であった。この病気は男子にのみ発現するが、その遺伝は母親を通じるものである。遺伝の流れは、母親であるアレクサンドラ皇后、祖母にあたるヘッセン・アリサ大公妃、さらに曾祖母にあたるイギリス・ヴィクトリア女王までたどることができる。

血友病を病むものは、何かしら些細な原因で傷を負い、出血が止まらない場合、死に至ることがある。それゆえに、アレクセイは、おとなしい子供のイメージが強い。しかしこの評伝では、別の面も描かれる。アレクセイは快活な子供の面があることも示される。その例として、３から４歳ごろ、アレクセイが皇帝主催の食事会に闖入して、無遠慮に客と会話をおこない、さらにはテーブルの下にもぐりこみ女官の靴を奪い取り、靴の中にイチゴを入れるいたずらをしたために、皇帝に叱られ、食事会から放逐されたというほほえましいエピソードが語られている。しかしこのわんぱくな少年が、日常生活の偶発的な事情により、出血し、そしてそれが止まらなくなり、それとともに尋常ではない痛みが発生し、少年が泣き叫ぶと事情が一変する。

これに関して1912年、皇太子８歳のときの、ポーランドにある皇帝の狩猟場スパラにおける有名な事件が語られている。皇太子はボートを係留させようとして、足に力を入れ鼠径部に内出血が生じたのであった。皇太子には３人の医師が付いていて、あらゆる手段が講じられたが、出血は止まらなかった。皇太子は危機的な状態にあるが、誰もなすすべがなく、最悪の場合を考えて死亡広告の準備もなされた。その中、ラスプーチンの電報が届いた。それには「皇太子の健康は回復し、彼はすぐに痛みから解放される」とあった。そしてその日には出血が止まったというのである。この有名なケースに対する解釈はさまざまであるが（私は、ラスプーチンの電報が到着して、皇太子の出血が止まったのは、単なる偶然であると考えている)、この著書では断定はしていない。次のように簡潔にまとめるだけ

である。

「両親の絶望、息子の回復に対する奇跡的力への期待、これらのことが、Г.E.ラスプーチンをして、皇帝一家に接近することを可能とした。このことは、後に家族の信用を落とすために用いられた。

現代の歴史家は、今までのところ、グリゴリー・ラスプーチン現象と彼の行動に対する影響力について論争をしている。

息子の病気が、母親の行動、願い、考えを予め定めた。毎年、息子の命、皇太子アレクセイの病気との戦いが、彼女の健康、精神力を奪ったのであった。」（22頁）

翌1913年、ロマノフ王朝300周年記念の式典においても、アレクセイ皇太子の体調はひどかった。皇太子は、兵士の腕に抱えられながら運ばれていた。この様子を収めた写真が残されているが、この著書には収録されていない。皇太子が血友病であることは極秘であったが、この機会に、一般の目に病弱な皇太子の姿がさらされ、ロマノフ王朝の行方に不安を感じさせた。

その後第一次世界大戦が勃発する。ニコライ２世はこの中、モギリョフにある総司令部に、皇太子を連れて行くことを決断する。前線においては医療水準が落ちるために、皇太子の血友病を考えた場合、リスクを伴うものであった。しかし王朝の後継者を前線において可視化することが必要であると考えた。その一因にはロマノフ王朝300年祭のアレクセイの在り方が作用していると思われる。しかしこの著作はこのような父親サイドの考えについては言及がない。皇太子アレクセイの前線における滞在を楽しんでいる様子を表す書簡が数通引用されるだけである。その一つを引用しよう。

「モギリョフ、1916年10月１日

愛する私のママ

昨日、私たちのところで、セルビアの将軍ユリシッチ、公使、随員が正

餐を取りました。彼らは、パパのために銀のセルビアの軍事十字架をもたらし、私には『勇気のために』という銘がついた、金のメダルをもたらした。私は教師との戦いの中でそれに値したのです。小さなコーリャは熱心に勉強しています。神よ、母と姉妹を守りたまえ。期待しています。
さようなら。アレクセイ」(30頁)

この書簡では、アレクセイにとっては、得意でなかった勉強との戦いが、授与されたメダルに値するというユーモア感覚がみられる。また別の母宛て書簡では(1916年11月13日)、母親に対して、「私にお給料を送る時期ですよ。10回お願いします。」と記しているところが子供らしさを感じさせて、ほほえましい。皇太子は制約の多い宮廷の生活から離れて、自由と冒険を楽しんでいるのであろう。おそらくアレクサンドラ皇后もこのことは十分理解していた。
彼女は、愛するアレクセイの将来の治世のためにあらゆる努力を惜しまなかった。しかしその努力のあまり、周囲に盲目になった。このあたりも簡潔にまとめられる。

「皇后アレクサンドラ・フョードロヴナは、息子が成長すること、彼が力強い帝国の玉座に座るのを見ることを夢見た。『私達はベイビーに、静かで、そして偉大な治世を残さなければなりません』。彼女は、夫に対して、第1次世界大戦期に書いた。母親としての本能のために、皇帝権力を壊すもの、将来の災厄に国家を導く全てに対して彼女は反対せざるを得なかった。執拗に政治的袋小路からの出口を探さざるを得なかった。彼女は、多くの人には理解できない、そして好まれなかった幻想の中に完全にいて、反対派の砲火を受ける最前線にいたのであった。」(31頁)

2月革命において、ニコライが、アレクセイではなく、ミハイル大公に譲位したのは、言うまでもなくアレクセイの健康状態、血友病に配慮したからである。著者は通例は史料に語らせるだけであるが、ここにおいては珍しく明確に史料解釈を補足している。

「フョードロフ教授がニコライ２世に対して、皇太子はすぐに家族から切り離され、両親が将来の立憲君主の養育に影響が及ばないとする知らせを伝えた後、初めて弟のために譲位するという決定に変更したのだ。いかなる親が、自らの非常に苦しんでいる息子を、悪意のあるものや全くの宣誓違反者の手に委ねて、確実な滅亡へと追いやることができようか？」（33頁）

家庭教師ジリャールは、皇后から皇太子にニコライの譲位のいきさつを説明するよう依頼されている。

「－知っているでしょう。アレクセイ・ニコラエヴィチ、あなたのお父さんはもう皇帝であることを望んでいないのですよ。

彼は驚いたように私を眺め、私の顔から何が起きたかを読み取ろうと努めた。

－なぜ？どうして？

－なぜならば、あなたのお父さんは、非常に疲れて、最近多くの重苦しいことに耐えたからですよ。

－そうですか。ママは私に言いました。私の父がここに帰ってきたい時、列車が拘束されると。しかしパパは、後でまた皇帝になるのですか？

私は彼にそれから説明した。陛下は、大公ミハイル・アレクサンドロヴィチのために譲位したのです。…

－しかしそれなら誰が、皇帝になるのですか？

－私は分かりません。今のところ誰もいません。

自分についての言葉は一言もなく、皇太子の権利についてのほのめかしもなかった。彼はひどく顔を赤らめ、興奮していた。少し沈黙してから、彼は言った。

－もしツァーリが、いないとすれば、誰がロシアを統治するのですか？

私は彼に次のように説明した。臨時政府が形成され、それが立憲会議の招集されるまで政治を行うであろう。そしてその時、ひょっとしたら、彼

の叔父ミハイルが帝位につくかもしれない。私は今一度この少年の自制心に打たれた。」(35-36頁)

こののち皇帝一家は、ツァールスコエ・セロー、トボリスク、エカテリンブルグで虜囚の生活を送り、最後はボリシェヴィキに殺害されることになる。この著書ではトボリスクにおける生活が集中的に描写される。少なくともトボリスクの生活の前半は、比較的自由が許され、給養体制もしっかりとしていた、悪くない生活であったからだろう。

皇帝一家はここで規則正しい生活を送った。ニコライに付き添った医師の息子は次のようにまとめている。

「トボリスクにおける両陛下の1日は、次のように行われる。全員午前9時に起き、午前のお茶の後に自分の課題に各自取り組む。皇帝陛下とオリガ・ニコラエヴナは読書、小さな子供達は勉強、皇后陛下は子供達に神学を教え続け、タチアナ・ニコラエヴナとともに朗読を行った。11時に、皆は散歩ために囲まれた土地に出た。午後1時に、昼食が行われ、その後またぞろ4時まで散歩。4時に午後のお茶が供される。お茶の後に、課業と手芸がまた行われ、他方、アレクセイ・ニコラエヴィチは、2時間ほど遊びで過ごす。7時半に正餐が出され、その後両陛下と正餐と昼食を共にした随員は、夜に止まる。そこにおいてはカードとドミノ遊びが行われる。掛け金は当然のことなし。しかも、毎晩、皇帝陛下は、朗読をする。主として古典作品の何かである。アレクセイ・ニコラエヴィチだけがいない。なぜならば正餐後に、寝に行くからであった。」(38-39頁)

冬期には庭に雪の山を作り、そりで滑るなど荒っぽい遊びもおこなわれた。それにはアレクセイは参加することはなかったであろうが。

この期間、皇帝一家はかつての女官アンナ・ヴィルボヴァとも連絡を取り合っていた。彼女は皇后と最も親しい女官であり、ラスプーチンと皇帝一家との間の窓口の役割を果たした。ツァールスコエ・セロー幽閉時に、彼女は、臨時政府により皇帝一家から離され、収監された。アレクセイの

アンナ（アーニャ）宛の書簡を引用する。

「トボリスク
1918年１月22日
親愛なる私の優しいアーニャ
あなたから便りをまたもらい、そしてあなたが私達のものを受け取ったと知りまた嬉しくなりました。本日は零下29°で、風が強く太陽が出ています。散歩をしました。ブーツを履いて、庭の周りを歩きました。昨日は、タチアナとジリク（家庭教師ジリャール：筆者注）と一緒に、フランス語劇を演じました。皆はさらに別の喜劇を準備しています。私たちのところには数人の素晴らしい兵士がいて、私は彼らと警備室において、チェスで遊びます。コーリャ・デレヴィエンコは、祝日ごとに私のところに来ます。ナゴルヌィは、私とともに寝ています。セドネフ、ヴォルコフ、クルップ、チェルモドフは、私たちとともにおります。昼食に行く時間になりました。愛しています。主があなたを守らんことを。A.」（49頁）

ここにも記されているが、冬期の楽しみとして家庭劇が演じられて、アレクセイも役を演じるなど主体的にかかわった。

またこの著書では、皇太子の性格や勉学の様子に関する証言が種々集められている。その中においては、内戦期に皇帝一家殺害に関する調査を行っていた白衛軍調査官に対する証言が、皇帝一家に対する忖度の少ないものとして興味深い。例えば、トボリスクで家庭教師を務めていたビトネルは、皇太子の性格として、素朴さ、自己満足・横柄・傲慢がないことを挙げている。さらに恐ろしく忍耐強いことも指摘している。足が痛いはずなのに、決してそれを口に出さないということである。そして率直に次のように認める。

「勉強において、彼はひどくスポイルされていた。彼は読むことがひどく苦手で、自ら読むよりもむしろ読んでもらうことを好んだ。１時間彼は勉強することが難しかった。おそらくこのことは、彼の病気によって説明

がなされた。彼は読書が好きではなく、皇后はこの件において不安になっていた。彼女は子供時代読書が好きであった皇帝陛下の範例を基にしていたのであった。」(47-48頁)

私が最も印象に残ったのは、皇太子が犬と猫と戯れている写真である。あふれ出る皇太子の無邪気さが印象的であった。この著書では、皇帝一家がロシア正教会により殉教者と認められたということで結ばれているが、異教徒にある私にはあまりピンとこない。むしろ、私にとって救いになったのは、不確かなものではあるが、何気なく本文に挿入されている皇太子の飼い犬ジョイの運命であった。最後に引用しよう。

「1914年 9 月に撮られた一枚の写真には、ツァールスコエ・セローのアレクサンドル宮殿のバルコニーにおいて、スパニエル犬ジョイがポーズをとっている。後に、皇太子アレクセイとともにジョイは、モギリョフにおける軍事映画にさえ出演した。臨時政府とボリシェヴィキ時代、ジョイは、ツァールスコエ・セローからツァーリの家族とともに、初めはトボリスクに、そして後にはエカテリンブルクに行った。ウラルにおいて、皇帝一家が滅んだ後、一部の情報によれば、スパニエル・ジョイは、白衛軍のおかげで、結局のところイギリスのジョージ 5 世のもとにいたということである。」(26頁)

Владимир Михайлович Хрусталев, *Наследник цесаревич и великий князь Алексей Николаевич (1904-1918), Краткий биографический очерк*, Москва, 2017.